

## パヤオ・ソデイカ操業について

金武漁業協同組合 パヤオ・ソデイカ部会  
宮城 守

### 1. 地域の概況

私の住む金武町は南北に長い沖縄本島のほぼ中央部に位置し、面積の約6割が米軍用地に接収された基地の町であるが、水芋やサトウキビ、果樹や花き類の生産など、基地依存型経済からの脱却に向けた一次産業の振興に取り組んでいる。また鍾乳洞を利用した古酒の貯蔵・熟成は本町で最初に行われた。町の南側には太平洋が広がり遠くは勝連半島、その先には浜比嘉、平安座、宮城、伊計の島々が眺望できる自然環境に恵まれた町である。

### 2. 漁業の概況

金武漁協は、正組合員54名、准組合員104名、計158名の組合員で構成され、パヤオ(浮魚礁)漁業、ソデイカ漁業、潜水器漁業、網漁業などに従事している。従来は沖縄県における高級魚であるスジアラ、シロクラベラ等を漁獲する潜水器漁業を中心とする漁業形態であったが、開発行為等による赤土流出、乱獲等様々な原因により沿岸の漁業資源が減少し、沖合操業のパヤオ漁業、ソデイカ漁業への転換が進んでいる。

### 3. 研究グループの組織と運営

部会は18名、16隻の漁船で構成されている。パヤオ漁業では、部会設置の3基のパヤオと、隣接漁協設置の共同利用の1基、そして県設置の3基、計7基を主に利用した操業を行っている。(図1) 部会の活動内容としては、①パヤオの設置・維持管理 ②技術交流会 ③先進地視察研修 ④漁家経営の勉強会 等である。ソデイカ漁業では①技術面での勉強会、②漁場の情報交換、③安全対策、④大漁のための取り決め 等を行っている。

### 4. 実践活動課題の選定動機

金武漁協は小規模な漁協で、後継者の育成や組合員の増員は重要な課題である。パヤオ漁業、ソデイカ漁業は潜水器漁業に比べ多額の資金を要するため簡単には従事者を増やせない状況にある。これまでのパヤオ、ソデイカ部会の活動内容を発表する事により、部会員の増加や後継者の育成に一役を担えたらと考えた次第である。これら漁業に馴染みのない方々に操業内容を紹介することはもちろん、同漁業従事者と意見を交わし相互の技術交流・改善に役立てることができたら幸いである。

### 5. 実践活動状況及び成果

私達は、5月～11月期はパヤオ漁業に、11月～4月期はソデイカ漁業にと、複合的に従事している。

【パヤオ操業】パヤオ漁業で安定収入を得るためには県敷設のパヤオ以外に常時4基のパヤオが必要不可欠であるので、昭和61年に初めてパヤオを設置して以来、流失する度に数十基のパヤオを補充してきた。パヤオ設置のために部会費を徴収したり、町祭り等で生産物を販売し、その利益をパヤオの設置費用に充てたり、共同作業によりパヤオ製作費用の軽減を図っている。

現在は町役場のパヤオ敷設事業の協力を得ながら1基当たり350万円のメーカー品パヤオを購入し、過去の失敗経験や試行錯誤の結果を生かしてパヤオを次のような構造にしている。①浮標はFRP製でポールの部分にはレーダー反射板及び自動点滅ライトを設置した。②係留ロープの長さは水深より400～600mの余裕をとる。③浮標と係留ロープの接続部分は、かつては大型の金属製シャックルを使用していたが、現在は強度の大きなゴム製のチューブ方式を採用している。(図2) ④係留ロープは製作時点で両端に輪をつくり、被膜チューブを入れて結網を簡素化し、かつ強度を保てるように工夫した。(図3) ⑤アンカーはホールデン型の500kgの鋼鉄製を使用し、直径25mmのチェーンを10m(重さ80kg)接続し、摩擦による切断防止を施した。このような改良を重ねた結果、現在ではパヤオの耐用年数が2年～3年以上へと延びている。

図4にマグロ旗流しの仕掛けを示す。漁具はグラスファイバー製の竿(3m50cm)に耐圧中通し浮(7寸玉)を通して固定する。竿の先には目印の旗を、下部にはおもり1kgを付け、竿が海面に立ち上がるようにする。次にナイロンロープを使用して3m間隔で7寸玉、6寸玉、最後に当たり浮子を1.5mの場所に取り付けて1mロープを足して中太ブランチハンガーを取り付け、投縄用パーロン130号に接続。本縄は、時間帯や水温の変化により50m～150mの間で、浅くしたり深くしたり調整する。

幹糸は本縄との接続金具の所にカブ袋を付けて15ヒロ間隔で8ヒロのニュークロー80号の枝縄にリング付きマグロ針2.2寸、2.4寸を付け、2本針から3本針の枝を出し、一番下に300～400号のおもりを取り付ける。

操業方法は、まずパヤオの潮上方向で魚群探知機によりマグロの魚影を探し出し、本縄の棚を決め、カブ袋にまき餌を詰め、針に半分切りしたムロアジカイワシの尾ビレ部分を餌がけする。(図5) 旗流しはパヤオの潮上500～1000m付近から開始し、パヤオの近くで旗をあげる。パヤオに漁具がからまないように注意をしながら、その作業を繰り返す。

【ソデイカ操業】図6はソデイカ旗流し漁の仕掛けである。早朝暗いうちに投旗作業を終了するが、夜が明けて見回りを始めると、漁具が他船のものと交差したり接近しすぎたりする等のトラブルが見受けられる。このようなトラブルを回避するために、ソデイカ部会では次のような取り決めをした。平均で20～30本を使用する流し旗は、最初の3本と最後の3本に点滅灯をつけ、自船の旗流しの開始位置と方位が他船にもわかるようにした。これにより部会員同士の漁具の交差やニアミスが大分避けられるようになった。

安全操業を期するためにソデイカ漁船には漁業無線機を装備するように努めているが、年々漁場が遠方化し、漁業無線の到達しない海域での操業を強いられている。そこで安全対策として出港及び帰港予定を組合または部会員に報告し、洋上においては無線機を使用して随時釣果と安全を確認し合うようにしている。

## 6. 波及効果

パヤオ操業では、パヤオの流失は避けることができない大きな損失であるが、先に述べたように縄の結合部分などの改良により耐用年数が2～3年以上へと延びた。今後、同様の改良が他の地域でのパヤオにも採用されていくことが期待される。

## 7. 今後の課題や計画と問題点

今後の部会活動として、これからは従来の捕るだけの漁業ではなく、部会員の認識を改革し、市場の開拓や独自の販路を確立したり、商品取引に向けた特産品の開発や付加価値を高める技術の習得に努めなければならない。それらを実現するために商工会や町婦人部との技術提携や特産品の開発、ブランド化を推進して行きたい。またソデイカ資源保護のための操業期間見直し（県海区漁業調整委員会指示による禁漁期を自主的に拡大する）や与論島近海の中層・表層魚礁を活用するために奄美地区漁協組合員との技術交流も計画している。

またインターネットの普及に伴い多くの分野で電子商取引が行われている現在、積極的にインターネットを導入し流通対策に活用する方法を検討するとともに、漁協や部会をホームページなどで紹介する事により若手漁業者の加入促進や育成に取り組んで行きたい。

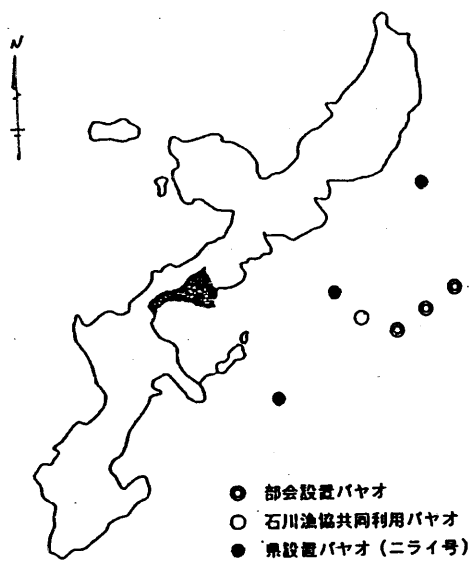


図1 金武町とパヤオの位置

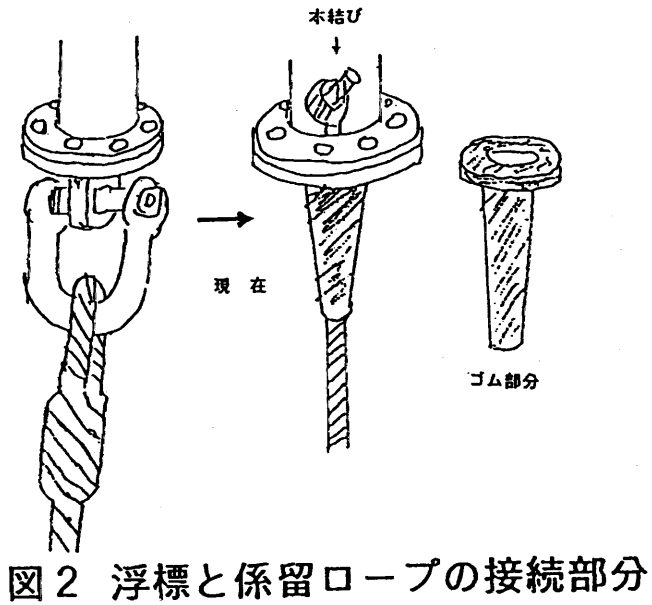


図2 浮標と係留ロープの接続部分



図3 ロープとロープの接続

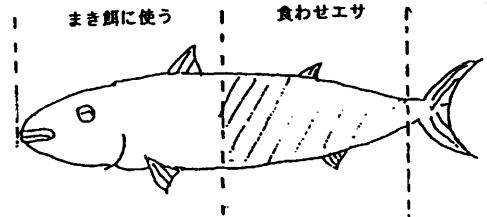


図5 エサの使い方

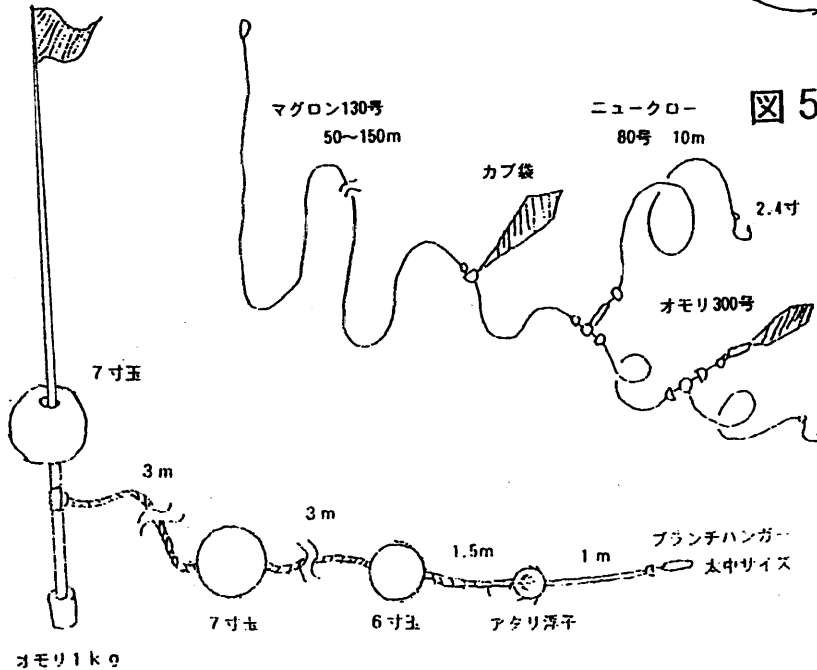


図4 マグロ旗流し漁の仕掛け

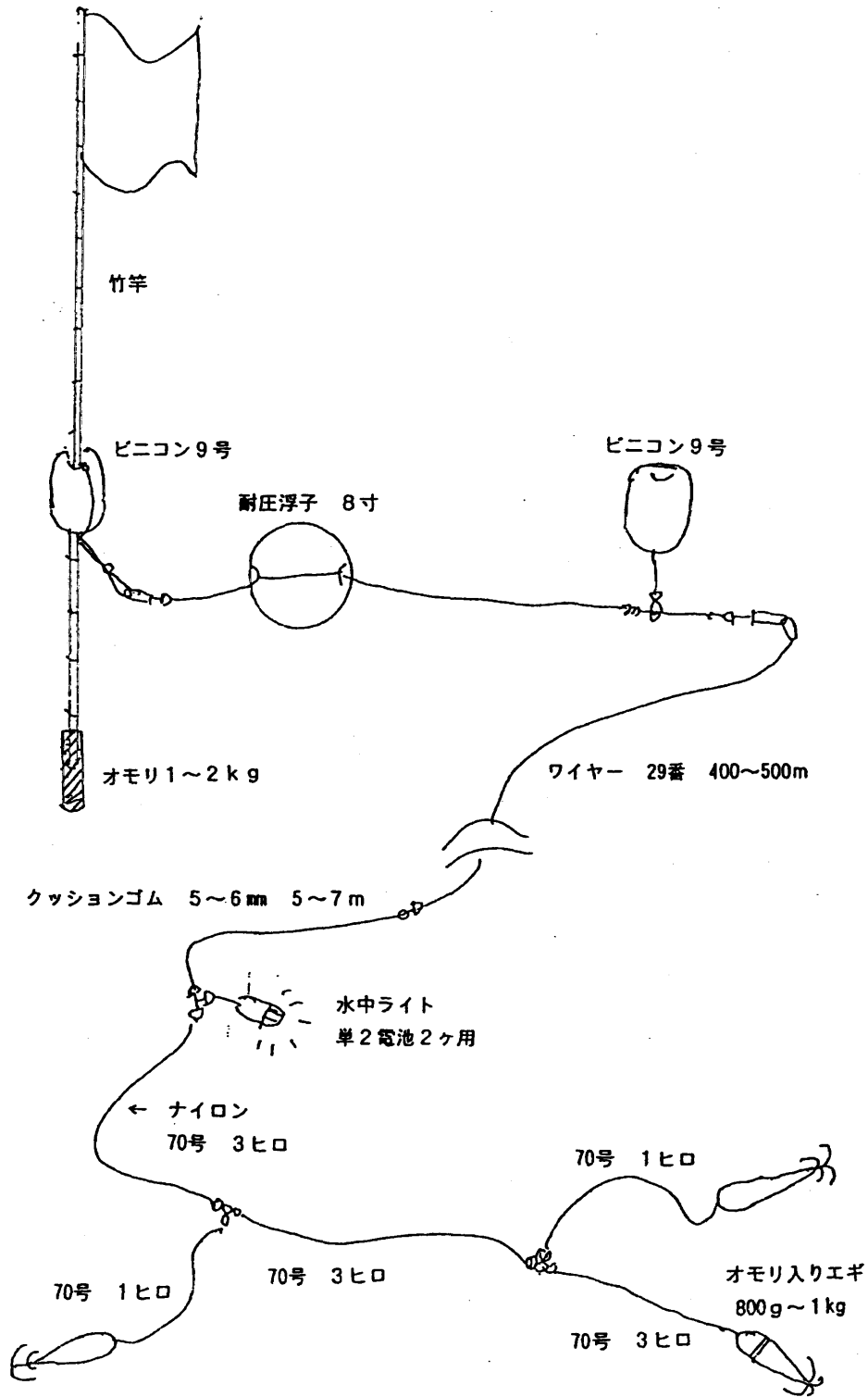


図6 ソデイカ旗流し漁の仕掛け